



死と命との戦いで



アルベルト神父

復活の徹夜祭は聖なる夜です。さらに、すべての聖なる徹夜の母と見なされています。四旬節と復活節との踏み切り、死と命との分かれ道、暗闇と光との分かれ道、このすべては復活の徹夜祭に含まれています。

なぜかという、その夜、「死と命との戦いで架の傷跡をまだからだに帯びていることを死を身に受けた命の主は、今や生きて治められ見せました。ですから、復活の出来事はイエス・キリストが真に神であることを確証することです。」（復活続唱）からです。

これを歌いながら、改めて復活の喜びを生きることができます。

「アレルヤ」という喜びの叫びを改めて歌うことができます。

私たちの信仰の源泉を祝うことができます。「キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰は無駄です」。(一コリント 15, 14)

日常生活にも、ニュース等に、時々『復活』という言葉が使われています。

通常の言語によると『復活』とは「生き返ること」、「いったん廃止、停止していたものなどがもとどおりになること」を意味します。再び返ること(前よりも強くかもしれない)、再び回復すること、再び登場することですけれども、実はこの世界の舞台から出ていないのです。

キリストの『復活』はこのような意味の『復活』でしょうか。

キリストの復活自体について私たちは何も知りません。なぜなら、キリストの復活は光の爆発のような出来事だからです。復活は死に対する決定的な勝利です。すなわち、神

の力の出来事でした。

しかし、栄光のからだ、復活したからだをもってキリストが使徒たちと出会ったことを知ることができます。キリストは復活してから、マグダラのマリアに、他の婦人たちに、使徒たちに、弟子たちに現れて、受難と十字

そのイエスは十字架につけられて死ぬほど本当に苦しみを受け、本当に死なれました(聖金曜日)。自分の命を捧げるイエスの本当の犠牲は、イエス自身から最後の晩餐でパンとぶどう酒の形態のもとに前をもって自分の命を捧げることでした(聖木曜日)。

聖週間の典礼、とくに聖なる過越の3日間は、主の受難と死と復活の神秘をあらためて生きるように呼びかけて下さいます。そして、キリストが自分の命をわたしたちの為に捧げたほど愛して下さったことを知って、わたしたちのうちにキリストに従いたいという望みがいつそう深く根を張ることができるようになります。

復活されたキリストは、これこそわたしたちの希望だからです。

すべてのものを抱くのは死・無ではなく、命・愛にあふれた神の存在です。

キリストの死と復活の神秘に触れる典礼に連続して与ることは大変かもしれません。しかし、教会暦全体の中心ですので、聖なる3日間の神秘を味わいましょう。



広島教区司教 **三末 篤實**

霊名 ヨゼフ

受洗年 1936年(幼児洗礼)

当時は、生後間もなく亡くなることもあった時代でした。万が一亡くなる前に神の子となっておく為、生後2時間で教会に行き、洗礼を授けられました。

生い立ち(家庭など)の環境について

長崎県平戸市宝亀町出身で、祖母は隠れキリシタンの経験を持つ家族です。6人兄弟、姉と妹の間に男4人の三男として生まれ、家は農業と商店を営んでいました。両親は、子どものために自分たちは贅沢しなくても、教育費は惜しみませんでした。また、近所の人が来ると食事をふるまったり、近くのバス停で長時間、待っている人に「お腹すいたでしょう」とおにぎりを出してあげるなど、分かち合いの心は家庭の中で、自然に信仰として身につけていきました。

司祭を目指すきっかけとその時期は?

小さいときから毎日教会へ行き、ミサや年下の子らの指導などをしていました。小さな小・中学校で色んな責任を持たされていました。中学卒業の頃、ミッションスクールに

行きたいと父に言ったら、神学校と間違われ、神学校に入ることになりました。同時に、希望していた長崎南山高校に一期生として入学しました。神学校の生活は、生まれながらに毎日ミサにあずかっていたので、生活も無理なく、司祭への道も自然と私にあった召命でした。

どんな司祭を理想とされていますか?

ひとことで言えば、キリストと生きること。“よろこぶ人と共によろこび、泣く人と共に泣く”(聖パウロのことば)

司教になると聞いたときは?

東京のカトリック中央協議会の職から、出津教会に主任司祭として長崎に帰った1984年4月1日のことでした。エイプリルフールにバチカン大使から枢機卿経由で連絡を受けて、最初は信じられませんでした。翌年1985年、司教に任命されましたが、知人が海外でバチカン放送を聞き、司教になったことを知ったとお祝いの電話をくれたときに実感しました。

生きがいを感じるときは?

今は司牧者として、みんなが生活の場で信仰に生きていることを見たり、知ったりするときに生きがいを感じます。

もし司祭になっていなかったとしたら?

中学校の先生です。実家は学校のすぐ近くにあり、いつも先生や近所の人が集まる家庭でした。家族・親戚に教員が多いこともあり、中学生のときから、その準備をしていました。人間性の形成に大切な時期だから中学生の先生になりたいと思っていました。

他の小教区と当小教区を比較すると

私にとっては、すべての責任がありますから、それぞれの小教区にがんばって欲し

いです。カテドラルは教区を中心ですから、多くの負担があり、感謝しています。他の教区の苦労話を耳にすることもありますが、広島教区の場合は皆さん協力的で苦労だと思ふこともなく、恵まれていると思ふいます。お祝いなど、行事の際に司祭・信徒が盛大なパーティーで一緒にお祝いするのも、他では珍しい広島教区ならではの光景です。

信徒の皆さんに期待することは？

教区のすべてのことが、幟町教会のみなさんにおんぶされて、大変だと思ふいますが、どうぞ「きょうどう」して、神のみくにの完成のために、よろしくお願ひします。

家庭で信仰を継承されていくことは理想です。しかし、子どもが塾や部活で教会に行くことができないときは、「私たち教会であなたの事を祈っているからね」と伝え、子どもには、短くても良いから自分の言葉で祈る習慣を身に付けて欲しいものです。祈りを言葉として何回も唱えるより、生きた祈りや、その祈る心こそ重要なのです。最後に「平和」についての思いを聞かせてください。

教区的全教会にとって、最も大切な神のみくにのあかしであり、神の子のあかしのために「平和をつくること」に最善を尽くすべきです。平和は神からの賜物です。人間は色々な欲を持ちますが、そのバランスが取れていれば人格者。どれか突出してしまうと罪となってしまう。人間のエゴが平和を壊してしまうのです。家庭でのコミュニケーションが「平和をつくる」小さな一歩なのです。それが家庭から社会、やがては国へと広がっていくのです。

メッセージ from バンガンスベルゲ神父

幟町教会で長年務められ、今はベルギーに帰国しておられるバンガンスベルゲ神父様から、東北東日本大震災の報道をご覧になり、被災者や私たちへのメッセージを寄せられましたので紹介します。

日本の地震と津波による大災害の報道は連日、ベルギーのテレビと各新聞のトップニュースになっています。その中で、日本国民の規律正しさと復興への意欲と全国民の団結ぶりがよく称賛されています。信仰を持っている者として、考えさせられます。

“神のみむねが行われますように”という主の祈りの言葉はどのように当てはまりますでしょうか。

自然界で、こういう災害が起こる原因と仕組みは、自然科学的知識によって、かなり解明されて、わかっています。

決して、“神の意志によって起こされた出来事”ではありません。このような考え方は全く、前科学的な考え方です。

この大災害のなかにあつて、人々が行うべき“神のみむね”とは：全力を尽くして、できる限り協力しあつて、被災者を助けることです。いま、あらゆる方面で必死に行われている救助の活動こそ、多くの人々がすばらしく行っている“神のみむね”の具体的な実現だと思ふいます。

被災者の方々のためにいのりつつ

バンガンスベルゲ

編集後記



インタビューで三末司教様の素顔にふれることができました。『細かいことは心配しないで、安心して神様のお導きに従いなさい』という大らかなお心は、とても暖かく包み込まれます。お話は色々な方向へと進み、実は紙面に書ききれていないことも…。司教様のとても明るくて、ポジティブなお人柄が、そのまま私たち広島教区のカラーになっていると、エピソードを聞く中で感じました。「後期ならぬ、末期高齢者になったから、ヨハネ・パウロ2世の足につかまって、天国の隅っこに行けるように引っ張ってもらうんだよ」というお言葉に「その時は、私たち背中を押してお手伝いします」とお答えしたものの、大勢の信徒が司教様の足にぶら下がっているから、まだまだ天国の門が開かれることは先のことでしょう。(か)

